

「ドストエフスキ研究会便り（16）」 カラマーゾフの兄弟、そしてスメルジャコフ

芦川 進一

- ★『カラマーゾフの兄弟』は、長い間私の最大の課題であり、中でもここに登場するスメルジャコフはこの上なく捉え難い「謎」、この作品の「ブラック・ホール」とも呼ぶべき存在でした。これらとの取り組みの結果は、既に「カラマーゾフの兄弟論」と「スメルジャコフ論」として公にしている（→21ページ）、殊にスメルジャコフの「謎」については、私の力の及ぶ範囲でしかありませんが、一応の考察を終えたと思っています。しかしカラマーゾフの世界と共にスメルジャコフの悲劇的運命、その生と死は今も私の意識から離れることはありません。
- ★ドストエフスキ世界に於いて最も深く絶望という「病」を身に負わされた存在、それがスメルジャコフではないでしょうか。彼を痛ましくも懼ろしい「病」の底に投げ込んだのは、その出生を始めとする理不尽で醜悪な個人的運命ばかりでなく、彼が生きるロシア社会の「病」でもあり、更にそれはドストエフスキが『夏象冬記』の旅で見出した西欧世界が宿す「病」でもあると考えられます。ドストエフスキはこのスメルジャコフの「病」を更に新約世界の磁場に置き、それに対する治癒策・癒しについて思索をする作家であり、この角度からの考察が私の課題であり続けてきました。
- ★そのような中、東京YMCAでの講演（2019/2、前回の「研究会便り（15）」に掲載）に続き、柴崎聰先生から日本キリスト教文学会の研究会でも発表をするようにとのお誘いを頂き、YMCAで取り上げた西欧近代の「病」との関連で、改めて『カラマーゾフの兄弟』とスメルジャコフについて考える機会を与えられたのでした（2019/3）。
- ★日本に於いて、ドストエフスキの「聖書熟読といふ体験」（小林秀雄）が持つ重要性に着目し、「信と不信」の間に引き裂かれつつ彼が続けた、「神と不死」とイエス・キリスト像の探求を正面から問題とする人は殆どいません。YMCAと日本キリスト教文学会という場で、この角度から『カラマーゾフの兄弟』とスメルジャコフに光を当てて論じることは、私には余計な気遣いをせずドストエフスキが見据える問題を取りあげ、彼が提示する「病と癒し」、更には「闇と光」「否定と肯定」という極性の問題の検討が出来ることを意味し、この貴重な機会を続けて与えて下さった柴崎先生には深く感謝をしています。
- ★研究会では時間的な制約もあり、発表の対象を二つに限定しました。まずは『カラマーゾフの兄弟』の構造と中心テーマを抽出する試みであり、次にその視野の下に、スメルジャコフが投げ込まれた不条理で醜悪な運命の問題を考えることです。それは先の言葉で言えば、彼が負わされた「病」について考えることであり、更にこれをイワンの言葉を用いて表現するならば、「罪なくして涙する幼な子」としてのスメルジャコフに光を当てることに他なりません。「罪なくして涙する幼な子」—— スメルジャコフはその誕生からして既に、「闇と光」「否定と肯定」という悲劇的悪魔的両極性を刻印されています。作者ドストエフスキはこの存在を、その先如何なる少年に、また如何なる青年に成長させ、究極何処にまで導いてゆこうとしているのか？今回はその方向性・ベクトルを見定めることを最大の目標としました。
- ★原稿化にあたっては、当日扱い切れなかったテーマの説明も新たに幾つか加えました。それらには文中に※印と共にその由を記し、本文とは活字の大きさも変えてあります。スメルジャコフと取り組む人たちに、考えるための素材をより多く提供しようと考えてのことです。

カラマーゾフの兄弟、そしてスメルジャコフ

発表者 河合文化教育研究所研究員 芦川進一
司会 柴崎聰
上智大学6号館203教室、2019年3月9日

目次	[ページ]
1. はじめに — 問題提起に代えて —	3
2. 『カラマーゾフの兄弟』の中心テーマ・問題軸	4
— スメルジャコフ像構成の前提として —	
第一のテーマ — 「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」 —	5
第二のテーマ — 「罪なくして涙する幼な子」の重層性 —	5
第三のテーマ — 四つの死 —	6
第四のテーマ — 「否定か肯定か?」「闇か光か?」の対立軸 —	7
第五のテーマ — 主人公アリョーシャ —	8
※第五のテーマは、原稿化にあたって付加しました	
3. スメルジャコフ像構成の「基礎資料」(→21ページ《付》)	10
4. スメルジャコフ像の考察	11
(1) — その名前 —	11
(2) — 筆者と二人の「父」によるスメルジャコフ像 —	13
(3) — 少年・青年時代の様々なエピソード —	15
(4) — クラムスコイの絵画「観照者」と重ねて —	18
★	
(5) — マリアとの交流、(イエスへの呪詛) —	
(6) — イワンとの交流、(出会いと対決、「悪業への懲罰」) —	
(7) — ドミートリイと検事と弁護士のスメルジャコフ像、(裁判の場で) —	
(8) — アリョーシャ、(祈りと鎮魂歌、「ゾシマ伝」) —	
※(3)は当日(1)(2)(4)の中で論じたのですが、原稿化にあたって 新たな項目として独立させました。新たに書き加えた部分もあります。 ・(5)以下は当日扱いませんでした(→5「おわりに」、《付》残されたテーマ)	
5. おわりに	19
《付》	
残されたテーマ	20
スメルジャコフに関する私の考察	21
スメルジャコフに関する「基礎資料」	21
次回ドストエフスキイ研究会便り(17)について	23

1. はじめに — 問題提起に代えて —

私が長い間ドストエフスキイと取り組み続けることになったのは、少々青臭い表現ですが、この作家が描き出す「闇」と「光」の混沌世界が、私が生きる現実世界の「闇」と「光」の混沌よりも遥かに奥深く真実なものと思え、果たしてこの混沌の先に「闇」を超えた「光」を見出す可能性はあるのか、もしあるとすれば、それこそ真の「光」であろう、その「光」に触れたいと思ったからです。殊に遺作『カラマーゾフの兄弟』に登場するスメルジャコフは、他のどの登場人物よりも深い「闇」の底に沈む存在であるばかりか、彼自身が他の存在全てを「闇」の内に吸い込んでしまうような懼ろしさを持ち、この作品に「ブラック・ホール」があるとすれば、彼こそが正にそれだと思われました。果たしてこの「ブラック・ホール」から発する「光」を見出し得るのか？ これが私の問い、最大の課題となったのです。

スメルジャコフについて考える時、常にまず私の頭に浮かぶのは、彼の誕生を巡る物語です。この衝撃的な物語の中には、既に彼自身の運命ばかりか『カラマーゾフの兄弟』全てが象徴的に表現されているように思われます。最初にこの「誕生物語」を確認しておこうと思います。

作品の舞台は「家畜追込町」^{スコトプリゴーリニエフスク}です。この異様な町名自体が、既に新約世界の「ゲラサ」の豚群(マルコ五 1-20 他)を思わせる象徴性を持つと言えるでしょう。この田舎町を冬も裸同然の姿でさ迷い歩く小柄な知恵遅れの乞食女、聖なる「宗教的痴愚」^{ユローチツァギ}のスメルジャシチャヤ(臭う女)がいました。ところがこの誰からも愛され畏怖される彼女が、何者かによって妊娠させられてしまうのです。町の人々は、カラマーゾフ家の家長である好色漢のフォードルの仕業だと疑います。しかし確たる証拠はありません。そうこうするうちに出産の夜が来て、産気づいたスメルジャシチャヤは、突然庇護されていた家を抜け出し、暗闇の中を一人でカラマーゾフ家まで辿り着き、張り巡らされた高い塀をよじ登り、庭に飛び降りると、そこの風呂小屋で赤ん坊を産み落とし、夜明け前に息を引き取ってしまいます。話はこれだけではなく、もう一つの話が重ねられます。

折しもその日は、カラマーゾフ家の下男グレゴリーとマルファ夫婦が、障害(六本指)を持って生まれた赤ん坊に死なれ、その埋葬を終えたばかりでした。この子が生まれてから三日間、一人押し黙って裏庭の菜園を耕していたグレゴリーは、洗礼授与の日が来ると司祭に対し、赤ん坊に洗礼を与えることを拒否します。「^{ドラゴン}畜ですので・・・自然界の混乱が起こったので・・・」。赤ん坊は生後二週間後にこの世を去ります。我が子を小さな棺に入れてやったグレゴリーは、深い悲しみの内にその死に顔を見つめ、墓穴に土がかけられるや墓前に跪き、地面に額をつけるようにして祈っていたと言われます。

スメルジャコフの誕生は、正にこの埋葬の夜のことだったのです。グレゴリーは風呂場でこの子を抱き上げ、住いに連れて来ると妻を座らせ、赤ん坊をその膝の上に載せ、胸に押しつけるようにして言ったのです。

「孤児(みなしご)というものは神さまの子だ。誰にとっても身内だ。

俺たちにとってはなおさらのことだ。これは俺たちの死んだ赤ん坊が送ってくれたのだ。これは悪魔の息子と信心深い女とから生まれたのだ。

育ててやるんだ。これからは泣くな」(三二)

グレゴリーは、この世で名さえ与えられずに死んだ自分たちの子に代って、新たに神と自分たちの死んだ赤ん坊から送られたこの子に、聖パウロから採っ

たパーヴェルという洗礼名を与えてやります。この子はやがて成長すると、料理係の下男として父フョードルの下に仕え、一人片隅から世に白い眼を剥き、運命に対する憎悪と呪いと復讐の心を育てゆくのです。

卓越したStory Tellerとしてのドストエフスキイが描き出したスメルジャコフの誕生物語を、私が拙い語り口でお伝えするのは無理があるのですが、お話ししながら私は、ここには既に人間の運命、その生と死に関する深い象徴性を湛えた見事な一篇の叙事詩が創り上げられているのを感じざるを得ません。

理不尽で醜悪な運命の内に放り込まれた存在、やがてその運命への復讐を「父親殺し」によって果たし、「悪業への懲罰」の末に神と出会い、しかも自ら首をくくって死ぬこの存在が指し示すものとは、人間と世界と歴史が行き着く究極の「闇」であるのか？ 或いは生と死の更に先にある究極の「光」であるのか？ —— この青臭く解き難い「問い」を、私は長い間自らに投げかけ続けてきました。私にとってスメルジャコフとは、この作品の正に「ブラック・ホール」であり、ドストエフスキイから課せられた、避けてはならない「謎」だったのです。

私は数年前、ライフ・ワークであった『カラマーゾフの兄弟』論を書き上げ、続いて所属する研究所のHPに新たに「スメルジャコフ論」を連載中ですが（→21ページ）、今は漸くこの存在について「光」の方向で言葉に出来るようになったことを感じています。しかし事はそう簡単に済むわけではなく、なお考えるべきことは数多く残されています。今日はこのスメルジャコフについて発表をさせて頂くわけですが、『カラマーゾフの兄弟』を一つの天体とすれば、この天体はどのような基本的構造を持つのか、最初にこの確認を試み（→[2](#)）、ここからスメルジャコフという「ブラック・ホール」が、その広大な天体の何処に位置し、如何なる運動をし、また如何なる特異性を持つのかについて、幾つかの線描を試みたいと思います（→[4](#)）。その際プリントの「基礎資料」43も利用しますが（→[3](#)、《付》スメルジャコフに関する「基礎資料」）、与えられた時間は一時間ほどです。発表は43項目の内の12まで、深い「闇」の底から新たな「闇」に一步を踏み出すスメルジャコフの確認で終わると思いますが、この濃い「闇」の検討自体が、微かでも「光」に触れるものであればと思います。

2. 『カラマーゾフの兄弟』の中心テーマ・問題軸 —スメルジャコフ像構成の前提として—

『カラマーゾフの兄弟』の「ブラック・ホール」たるスメルジャコフ。この存在は作品中でどのような位置を占め、どのような役割・意味を持つのかを明らかにすること —— 当然ですが、このためには『カラマーゾフの兄弟』全体の構成と中心テーマを明らかにする作業と、スメルジャコフ像自体を明らかにする作業とをセットに行われる必要があります、これら二つの作業間を繰り返し往還し、それぞれを常に修正してゆかなければなりません。今日は『カラマーゾフの兄弟』について、私の今までの取り組みを基に、まずこの[2](#)でその中心テーマと考えるものを四つ提示してから、スメルジャコフ像の検討に進みたいと思います（→[3](#)・[4](#)）。先にお話しましたように、カラマーゾフの世界全体をどう捉えるかということは常に私の課題となっていて、これら四つが決して最終的な結論でないことはご了解下さい（実際今回の原稿化にあっても、「四つ」を「五つ」にしました。その理由は後述します → 8ページ「第五のテーマ」）。

第一のテーマ — 「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」—

私は『カラマーゾフの兄弟』とは、何よりもまず「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」たちが繰り広げる宗教的認識の深化と覚醒のドラマであり、その魂の「成長史」であると考えています。このことを端的に示すのが、カラマーゾフ家の次男イワンが末弟のアリョーシャに語る次のような言葉です。

「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。[中略] そういう連中が、飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？ 他にもない、神はあるかとか、不死は存在するかとかいう世界的な問題なのだ」(五三)

「神はあるのか否か？」「死を超えた永遠の生命はあるのか否か？」——このような問いを生根底に置いて生きるのが、「ロシアの小僧っ子」に限らず、つまり国籍・時代・老若男女を問わず、真の意味で人間なのだ——私はこれがイワンを超えて、ドストエフスキイその人を貫く根本の信念であり、『カラマーゾフの兄弟』を貫く根本の思想であると考えています。「神と不死」の問題に焦点を絞ることを受け容れない人たちも多くいます。我々人間が様々な信念・思想の上に立つことは当然であり、それらが互いにぶつかり合うことも必然でしょう。この問題に今日私はこれ以上立ち入ることはせず、イワンが言う「ロシアの小僧っ子」への全面的な共感を土台・前提として、話を進めさせて頂きたいと思います。

第二のテーマ — 「罪なくして涙する幼な子」の重層性 —

「神と不死」という大テーマの下に展開する『カラマーゾフの兄弟』。その第二のテーマは、何重にもわたる「罪なくして涙する幼な子」たちの問題だと考えられます。世界に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たち——ご存知のように、これはイワンが凝視し弾劾する地上世界の現実です。至る所に繰り広げられる無辜の幼な子たちの受難。この悲惨な現実を見据え、アリョーシャを相手にイワンが繰り広げる神否定と、神の世界の否定、そして「大審問官」の叙事詩。これらイワンによる一連の「叛逆」の思想の表明は、『カラマーゾフの兄弟』の頂点の一つですが、既に皆さんもよくご存じと思いますので、今日は説明を省かせて頂きます。

「これでもか、これでもか」と次々に具体的な例を挙げ、イワンが指し示す「罪なくして涙する幼な子」たち。しかし注意すべきですが、この現実を目を広く世界に向けずとも、この作品では当のイワンを含むカラマーゾフ家の兄弟四人が全て、その身に負わされた運命なのです。幼くして母に死なれ、父親からは「忘れ去られ、棄て去られた」兄弟たち。作者は彼ら一人一人を、魂の真の母と父を、そして真の故郷を求めて、それぞれの人生の旅を続ける若者として提示しているのです。ここに既に「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」という、今挙げた『カラマーゾフの兄弟』第一のテーマの原型があり、かつその具体的な展開があると言うべきでしょう。ドストエフスキイは、これらカラマーゾフ家の「罪なくして涙する幼な子」たちを、故郷の「家畜追込町」に呼び寄せ(スメルジャコフだけは誕生以来、この町で父の下男としての生を運命づけられています)、ここで立て続けに起こる二つの死、ゾシマ長老の死とフォードル惨殺というクライマックスに向けて、彼らのドラマを収斂させてゆくのです。

その過程で浮かび上がるのが、更に二人の「罪なくして涙する幼な子」たち——理不尽で醜悪な運命の内に投げ入れられ、家畜追込町で人知れず苦しみ、それぞれに運命への復讐を謀り、そして死んでゆくイリュージン少年とスメルジャコフです。我々読者は、ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』の最深奥に、これら二人の「罪なくして涙する幼な子」たちの生

と死を置いていることに、最大の注意を払うべきでしょう。殊にスメルジャコフは、何重にも「罪なくして涙する幼な子」の運命を背負わされた存在なのです。そして父親フォードルも含め、兄弟イワンとドミートリイの運命ばかりか、これら家畜追込町の「罪なくして涙する幼な子」二人の運命にもじつと目と心を注ぐのが、主人公の末弟アリョーシャです。ドストエフスキイはこのアリョーシャに、師ゾシマ長老の死という試練を乗り越えさせ、「実行的な愛」を以ってこれら不幸な存在に寄り添わせつつ、彼らの死を超えた「永遠の生命」を探らせるのです。(アリョーシャについては、この後「第五のテーマ」として、改めて取り上げます)

このように「神と不死」の問題と、何重にも重ねられた「罪なくして涙する幼な子」たちの問題とは、互いに表裏一体となつて、『カラマーゾフの兄弟』全篇を貫く中心テーマ・問題軸を構成するものであり、この作品を複雑で難解にすると共に、この上ない奥行きと深さを与えているものです。しかしこれら二つの内、「罪なくして涙する幼な子」たちの問題については、とかくその多層性を見落とし、専らイワンが提示する「罪なくして涙する幼な子」にのみ目を向ける読者・評者が少なくありません。そしてアリョーシャを核として展開する、「神と不死」の問題と「実行的な愛」のドラマは、殆ど正面から取り上げられないのが現実です。

第三のテーマ — 四つの死 —

以上二つのテーマを中心に据える『カラマーゾフの兄弟』。このドラマを具体的に駆動させるのは二つの死、つまり主人公アリョーシャの「実の父」フォードルと「魂の父」ゾシマ長老、これら二人の父の死です。しかも前者はイワンとスメルジャコフによる「父親殺し」として、後者は聖者の死体が放つ「腐臭事件」として、共に家畜追込町ばかりか広くロシア全土を巻き込んで、人々の心を震撼させる大醜聞を引き起こし、この作品の主要ドラマを駆動させると共に、最後まで引っ張って行く牽引車としての役割も果たすでしょう。殊に前者はイワンとスメルジャコフとドミートリイを、後者はアリョーシャを、それぞれ過酷な試練に投げ込むことによって、「神と不死」探求の旅に於ける決定的な歩みを各人に促すことになるのです。

死が新たな生の始まりとなるという逆説——ドストエフスキイがこの作品に込めたメッセージを何よりも鮮やかに示すのは、作品冒頭に置かれたヨハネ伝のイエスの言葉です。

「誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」(ヨハネ十二 24)

ゾシマ長老の死ばかりでなく、好色漢で破廉恥漢で瀆神的道化たるフォードルの死さえもが、「一粒の麦」として「地に落ちて」「実を結ぶ」逆説。イエスの十字架上の死を見据え、ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』の中心に据えたのは、正にこの死と復活の逆説だと考えるべきでしょう。

更に「死」ということで忘れてならないのは、この作品にはもう二つの死、痛ましくも懼ろしい一対の死が描かれるという事実です。先に述べた家畜追込町の「罪なくして涙する幼な子」たち、イリュージン少年とスメルジャコフの死です。アリョーシャの二人の「父」の死が引き起こす大醜聞は余りにも強烈なもので、ともすると我々読者は、イリュージンとスメルジャコフの死の方には、それほど大きな注意を向ける余裕がなくなってしまいます。しかし注意すべきことに、これら二人の死は共に、フォードルとゾシマ長老の死に劣らず、またそれらと密接に関連し合つて、主人公アリョーシャの心に激震を引き起こすのです。二人の父の死がアリョーシャを「神と不死」探求の旅に於ける一つの帰結点に導き、彼にイエスとゾシマ長老の死を超えた「永遠の生命」との出会いを果たさせるとすれば、これら「罪なくして涙する幼な子」

二人の死はアリョーシャに、イエスとゾシマから託された「実行的な愛」を、現実世界に於いて生きて証させる契機となるのです。ドストエフスキイの見事な構成です。

『カラマーゾフの兄弟』とは四つの死を核として、しかも一対の死が二組、重層的に構成され、それらを駆動力・牽引力として展開する「一粒の麦の死」のドラマ、「死と復活」の逆説的ドラマだと言えるでしょう。これら四つの死を超えて、果たして「神と不死」の問題は解かれ得るのか？「罪なくして涙する幼な子」たちの涙は贖われるのか？家畜追込町というゲラサの湖底に沈められた豚群は、死の闇の淵から再び命の光の中に呼び戻されるのか？——ドストエフスキイは、主人公アリョーシャばかりか、我々読者をもこれらの問いの内に投げ込み、イエスの「一粒の麦」の死の譬を導きとして、「死と復活」の問題への究極の答を探ることを迫ったと考えられます。

この作品で「死」が一対の形で描かれるのは以上の二組、「四つの死」ばかりではありません。最初に見たスメルジャコフの「誕生物語」に於いても、既にグレゴリー夫婦の赤ん坊の死と、スメルジャコシチャヤの死とが相次いで描かれていました。これら一対となった二つの死とスメルジャコフの誕生。ドストエフスキイがここに深い意味を込めていることは明らかです。先の「罪なくして涙する幼な子」の多層性と同じく、「死」もまた多層的に構成され、生と共に死が描かれ、死と共に生が描かれる——ここにあるのは、ドストエフスキイが何重にも『カラマーゾフの兄弟』に込めた死と復活の逆説、「神と不死」の問題を巡る象徴性の奥行きと深さであり、これらを受けて宗教的認識の深化と覚醒の歩みを、そして「実行的な愛」の生を進めてゆくのが主人公のアリョーシャなのです。

第四のテーマ 「否定か肯定か？」「闇か光か？」の対立軸

（『カラマーゾフの兄弟』第五篇のタイトルは「肯定と否定」ですが、本論では以下に記すように、内容的なことを考慮して、敢えて「肯定」と「否定」の語順を逆にしています）

次に指摘すべきは、この作品を貫く「否定と肯定」「闇と光」の対立軸です。しかし「否定と肯定」「闇と光」の対立軸——このように表現すると、対立する二つの概念を示すことは出来ても、まだ静的かつ抽象的で、そこに生まれる両者の動的な逆説的・弁証法的ドラマまで表現し得るかは疑問です。むしろ「否定か肯定か？」「闇か光か？」と表現し、この二者択一の対立軸・問いがこの作品を貫いていると言う方が適切ではないでしょうか？この動的な対立軸・問いが主人公たちの心を深く分裂させ、『カラマーゾフの兄弟』の世界を形而上学的・宗教的緊張感で張り詰めさせ、かつ躍動させていると考えられるのです。

これを改めて「第一のテーマ」に即して平易に表現すれば、「神と不死」の問題とは、実際には「神はあるのか否か？」「死を超えた永遠の生命はあるのか否か？」、このような妥協を許されない絶対的二者択一の問いとして、次男イワンの心を苦しめていると言えるでしょう。そればかりではありません。カラマーゾフ家の家長であり、自ら破廉恥な瀆神的道化を演じ続けるフョードルさえも、この問いをそのまま息子たちに投げつけることから分かるように（三八）、魂の分裂から決して解放されてはいないのです。

更に具体的に言えば、登場の時から既に「光」の内にあると思われるアリョーシャでさえも、その内には「闇」を宿す若者として描かれています。第一篇、出家を決意したアリョーシャの心について、筆者はこの青年が「俗世の憎悪の闇から愛の光に向かって身を引き剥がそうとしていた」と記し、彼の内には既に「闇」と「光」の分裂・相克が存在していたことを指摘します。またこの時彼を呼び招いたのは、イエスの「なんぢ若し全からんと思はゞ一切を分ち與へよ、かつ來たりて我に従へ」という言葉であったとされ、この青年は天上世界と地上世界との間で「一切か無か？」の選択を迫られたのだと報告されます。続いて筆者は、このイエスの言

葉を受けて故郷を目指すアリオージャの心を、こう表現するのです。

「《一切》の代わりに二ループリを与えたり、《我に従へ》の代わりにただ礼拝式に通ったりするだけなど僕には出来ない」「そこ〔故郷〕では《一切》〔を与えているの〕か、それともそこでも《二ループリ》しか〔与えていないの〕か？」（一四）

この物静かで穏やかな青年を貫くものも、「一切か二ループリか？」という絶対排中律の対立軸・問いであり、それは「闇」の底から「光」を求める心、「我に従へ」というイエスの呼びかけへの応答、「神と不死」に向かっの妥協のない求道精神の表現としてあるのです。

長兄ドミートリイが捕われるのは「マドンナの理想」と「ソドムの理想」という相対立する理想です。彼はアリオージャに向かい、自分の心が「美」を巡って激しく分裂し、神と悪魔とが戦いを繰り広げる戦場であると訴えます。ここにもまた芸術から宗教に跨る「神か悪魔か？」「一切か無か？」の分裂と問いが存在し、この両極分裂の底でドミートリイは、女性の美と愛に賭ける激しい情熱的な若者として描かれるのです。そして二者択一の対立軸という問題では、更にこの作品に登場する女性たち、グルーシェニカもカチェリーナもリーザも皆、同時に二人の男性を深く愛し、その心を分裂させて苦悩する存在です。ここにも考えるべき様々な問題が存在するのですが、今回は立ち入って論じることは出来ません。

さてこれら登場人物の中でも、イワンと共に悪魔的・悲劇的分裂を極限まで運命づけられた存在がスメルジャコフです。今日私は彼の「誕生物語」から始めましたが、スメルジャシチャヤが生んだ赤ん坊を妻マルファの胸に押し付け、この子を「神さまの子」として引き受けることを宣言したグレゴリーは、なお妻に向かって、これは「悪魔の息子」と「信心深い女」とから生まれたのだと語ったのでした。この朴訥で純朴な男は、赤ん坊を「神さまの子」として受け止めたものの、「竜」の出現から始まる「自然界の混乱」に、魂を震撼させられてしまったのです。

かくしてスメルジャコフとは、この世に生まれ出た瞬間から「悪魔の息子」と「信心深い女」との子、「闇か光か？」「否定か肯定か？」の分裂を刻印された存在として運命づけられていると言えるでしょう。今日我々は様々なエピソードの内に、この「悪魔の息子」と「信心深い女」とから生まれたスメルジャコフが自らの内に宿し、また他者の内にも刻印する対立軸・両極性を確認し、更にその延長線上で、この「神さまの子」たる存在がこれから後如何なる懼るべき分裂の道に踏み出すのか、筆者が予告する場面まで辿り着きたいと思っています。この存在を追いかけることは、『カラマゾフの兄弟』の正に中心テーマを追いかけることに他なりません。

第五のテーマ 主人公アリオージャ

※研究会での発表の際は、アリオージャを独立して取り上げることはしませんでした。しかし今までの説明でお分かりのように、彼はこの作品の第一から第四のテーマのいずれにも、重要不可欠な役割を持って登場しています。作者も冒頭で記すように、『カラマゾフの兄弟』の「主人公」はアリオージャなのです。今回発表の原稿化にあたっては、スメルジャコフの占める位置と、彼に対してアリオージャが果たす役割の重大性を改めて明確にするために、当日アリオージャについて語ったところを独立させ、更に一部加筆をした上で、「第五のテーマ」として掲載することにしました。活字は本文より

小さくし、行も下げてあります。

「神と不死」、「罪なくして涙する幼な子」、四つの死、そして「否定か肯定か？」の対立軸——『カラマーゾフの兄弟』の中心テーマを四つ確認してきましたが、これらのテーマのいずれにも、アリョーシャが深く関わっていることに改めて注目をしたいと思います。

先に見たように次男のイワンが神否定と、神の世界の否定、そして「大審問官」の叙事詩を投げつける相手は、そしてこの兄の「叛逆」の思想全てを正面から受け止めるのはアリョーシャです。イワンばかりではありません、アリョーシャは瀆神的道化たる父フォードルの内に潜む不安と懼れを理解し、長兄ドミートリイが延々滔々と述べ立てる「告白」にもじっと耳を傾ける「天使」なのです。更にはドミートリイが絶望の底に放り込んだイリュージョン少年には、コーリヤを始めとする少年たちと共に、その死に至るまで寄り沿い続け、少年の父スネギリョフの苦悩と悲しみにも正面から向き合う存在です。

イリュージョン少年に加え、アリョーシャはもう一人の「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフに対しても、その恋人マリアと共に深い愛を以って臨み続け、遂には彼自身が編んだ「ゾシマ伝」の最後で、自ら命を絶ったこの異母兄の死を超えた「永遠の生命」を宣言するに至るでしょう。私は「ゾシマ伝」最後の一章は、師ゾシマの言葉を採録しつつ、アリョーシャが亡き兄スメルジャコフに捧げた鎮魂歌だと思います。

この「ゾシマ伝」について、そこに記された亡き兄に捧げるアリョーシャの鎮魂歌について、またスメルジャコフとその恋人マリアとアリョーシャ三人の交流について等々——これらを描き出すドストエフスキイの卓越した構成と筆に関して、詳しくは私の「カラマーゾフ論」と「スメルジャコフ論」をお読み下さい（→21ページ）。

こればかりではありません。アリョーシャはグルーシェニカやカチエリーナ、リーザとその母ホフラコフ夫人ら女性たちにも深く信頼され愛される青年、物静かで穏やかな信と愛の人であり、他人を批判したり裁いたりすることはまずありません。このアリョーシャのことを中性的で生彩がないとし、中途半端さや物足りなさを感じる人たちが少なくないようです。更にはアリョーシャがスメルジャコフだけには心を向けず、福音書のイエスとも重ねられるこの信と愛の人に関して、作者ドストエフスキイの人物造型上の不備を指摘する評者も内外に少なくありません。

しかし私はこのような見方に賛成しません。敢えて言えば、これはテキストの読みの不徹底から来る見方だと思います。今まで見てきたように、またこれからも見てゆくように、スメルジャコフに関する記述を一つ一つ追いかけて、また彼に関する問題を一つ一つ検討してゆくという作業から、スメルジャコフの内なるドラマは自ずと明らかになり、また彼とアリョーシャとが切り結ぶ幾つかの接点も浮かび上がり、その先には作者ドストエフスキイが、如何に確固たる構成とテーマの下にこの作品と取り組み、これら二人の人物を造型したのかも明瞭に浮かび上がって来るはずですが、今回の私の作業は43の「基礎資料」を提示し、これを基に具体的にスメルジャコフ像を提示することですが、あとはこれを「叩き台」として、皆さんが一人一人『カラマーゾフの兄弟』のテキストと取り組み、自らのスメルジャコフ像とアリョーシャ像を構成して頂ければと思います。

アリョーシャについて、ここで取り敢えず纏めておきましょう。

アリョーシャとは、

師ゾシマ長老の遺訓を受け、
不幸な人々と正面から向き合う「実行的な愛」の人であり、
彼らの苦悩に寄り添い、
彼らを、運命の悲劇的悪魔的陥穽の中から「光」の中に導き出すべく、
命を賭して戦う「戦士」である ——

ドストエフスキイは、アリョーシャを「戦士」だと記しこそすれ、決してひ弱で生彩の無い青年としてなど描いてはしません。彼がこの若き主人公の背後に、ゾシマ長老やその

兄マルケルを通して、十字架上のイエスを置いていること、『カラマーゾフの兄弟』の究極には、このイエスと重ねられた主人公アリョーシャの造型があることは、何よりも冒頭に置かれた「一粒の麦の死」の譬が指し示すことでしょう。静かに十字架を担い歩む「戦士」がアリョーシャなのです。またこのことは、先に見たように、彼自身が出家にあたり、イエスの「一切か無か？」の問いかけに正面から応えたとされることから明らかです。このアリョーシャ像をイエスとの関係で捉えないことから、彼とスメルジャコフとの関係も正しく理解しないという結果が生じるのであり、ひとたびここに気づけば、アリョーシャはスメルジャコフだけには冷淡であるどころか、ドストエフスキイがこれら二人の「交流」を、イエスに由来する「実行的な愛」を土台として、見事な構成と筆で力強く刻んでいることに気づかされるはずで

『カラマーゾフの兄弟』についても、改めてその構成と中心テーマを纏めておきます。

『カラマーゾフの兄弟』とは、

「神と不死」探求のテーマが中心骨格たる縦糸として貫き、
そこに何重もの「罪なくして涙する幼な子」のテーマが横糸として絡み合い、
更にゾシマ長老とフォードル、イリュージン少年とスメルジャコフ、これら一対の死が二組、都合「四つの死」が起動力・牽引力となって具体的にドラマを展開させ、
主人公たちの内に「闇か光か？」「否定か肯定か？」の対立軸・問いを渦巻かせてゆく、
その分裂・混沌を「実行的な愛」の人、主人公のアリョーシャが受け止め、散乱し渦巻くベクトルを決定的な一条の「光」に向けてゆく――

このようなテーマと構成を持ち、極めてダイナミックかつドラマチックに展開する作品世界だと言えるでしょう。これら全体を捉えない限り、カラマーゾフの世界とは「万物照応」「カーニヴァルの饗宴」どころか、それこそ一切万物が支離滅裂な混沌と化した世界、グレゴリーイが言う「自然界の混乱」としてしか立ち現れないでしょう。今日はこのような視野の下に、後半の残された時間をスメルジャコフの検討に充てたいと思います。

3. スメルジャコフ像構成の「基礎資料」

スメルジャコフについて考えるにあたり、我々の前に立ち塞がる高く厚い壁があります。それはこの存在に関する様々なエピソードの一つ一つが、「誕生物語」のように衝撃的でスキヤンダラスなものばかりで、容易には解き難い深い象徴性を帯びているという事実です。これらのエピソードを「基礎資料」として数えてゆくと、数え方にもよりますが、43もの数に上ります。一般的に我々読者や評者は、これらスメルジャコフに関する「基礎資料」の全体を検証せずに、自分の関心を惹くものだけを取り上げて論じる傾向があります。その結果、とかくこの存在が持つ病的で否定的な側面のみが強調され（それらも興味あるものですが）、作品全体のテーマや構成との関係で捉えられるべきスメルジャコフの全体像は、彼とグレゴリーイやアリョーシャとの関係を始めとして、何処か遠くに置き去られてしまいます。私の許でドストエフスキイを学ぶ人たちも、これらの基礎的なデータ全てを確実に踏まえ、これを土台として何らかの統一的なスメルジャコフ像を構成し、同時に『カラマーゾフの兄弟』全体について思索を進めるということはなかなか難しいのが現実です。しかしこの43の壁と正面から向き合い、突破口を開く若者たちが現われつつあることも事実です。

今日は時間的な制約もあり、「基礎資料」43の全てを検討することはとても無理なため、12番目までを主な考察の対象としています。このことでスメルジャコフという存在を、『カ

ラマーゾフの兄弟』全体の構成と中心テーマの中に、出来るだけ簡潔かつ骨太に位置づけた
 と思っています。43の「基礎資料」は全て、最後に《補》として掲載してありますので、
 『カラマーゾフの兄弟』とスメルジャコフについて取り組む際の参考になさって下さい。

4. スメルジャコフ像の考察

以下ではスメルジャコフに関する43の「基礎資料」の中から、最初の12項目を選び、
 更にそれらを★印で「1-7」・「8-11」・「12」という3つの纏まりに分けました（各項目
 末に付した[]は、作品の[篇・章]を表わします）。これらに含まれる問題を検討することから、
 スメルジャコフ像構成の土台と方向性を得たいと思います。

★

1. 誕生（グレゴリー夫婦の悲劇、スメルジャシチャヤの悲劇、「自然界の混乱」） [三2]
2. 名前の付与（「パーヴェル・フョードロヴィチ・スメルジャコフ」） [同]
3. 猫の葬式遊戯（少年の頃、猫を殺害しては葬送の歌をうたう、グレゴリーの懲罰） [三6]
4. グレゴリーによる聖書教育（12歳、創世記「光」の起源についての問い） [同]
5. グレゴリーの反応（殴打、癲癇発作の開始、フョードルの庇護） [同]
6. フョードルによる教育の試み（15歳、フョードルの書架への関心、教育の失敗） [同]
7. （6の後、間もなく）潔癖癖の露呈（食物に対する病的なまでの警戒と吟味） [同]

★

8. モスクワへの料理修行（数年間、モスクワへの無関心、寡黙さ、人間嫌い） [同]
9. 帰郷・1（面変わり、洒落者に、外見は老け、顔は黄ばみ、皺が多く、去勢派のよう） [同]
10. 帰郷・2（内面は変わらず、人間嫌い、女性嫌い、料理の才、金銭への潔癖さ） [同]
11. 癲癇発作の頻発化（フョードルによる結婚の勧め、蒼ざめて無視） [同]

★

12. 「観照者」スメルジャコフ（クラムスコイの絵画に重ねて、新たな両極的行動の予告） [同]

これら12項目を基に、以下の(1)から(4)まで、四つのテーマについて考察を進めます。
 右に➡で示した番号は、それら四つと対応する「基礎資料」の番号です。

考察

- (1) その名前・「命名」 ➡ 2
- (2) 筆者と二人の「父」によるスメルジャコフ像 ➡ 3、(17-18)、(37)
- (3) 幼年・青年時代の様々なエピソード ➡ 3-7、8-11
- (4) クラムスコイの絵画「観照者」 ➡ 12

考察(1) — その名前・「命名」 —

「基礎資料」の1番目、スメルジャコフの「誕生物語」については、**1**「はじめに」で紹介したのに続き、**2**『カラマーゾフの兄弟』の中心テーマに於いても(四)で取り上げ、我々は専ら「否定か肯定か?」「闇か光か?」の分裂を刻印されたスメルジャコフに焦点を絞ってきました——生まれたばかりの赤ん坊を前に、グレゴリーは妻のマルファに言ったのでした。「これは悪魔の息子と信心深い女とから生まれたのだ」。この粗暴ながらも純朴で愛情深い男は、赤ん坊を「神さまの子」として身に引き受けたものの、次々と自分を襲う懼るべき出来事を未

だ心に納め切れず、自分が「自然界の混乱」の内に投げ込まれてしまったと感じていたのです。

ここからドストエフスキイは、この子を「否定か肯定か?」「闇か光か?」、果たしてそのいずれ側で成長させ、また最終的にいずれ側に導こうとしているのか? ここに『カラマーゾフの兄弟』が持つ大きな謎があり、スメルジャコフについて考えるべき大きな課題があるというのが我々の出発点でした。以上を確認した上で、「基礎資料」2番目の彼の名前・「命名」から、12番目の「観照者」に至るまで、この延長線上で考察を進めてゆきたいと思います。

「基礎資料」2に進みます。

「パーヴェル・フォードロヴィチ・スメルジャコフ」—— 既に確認したように、この洗礼名「パーヴェル」は、グレゴリーが新約聖書の聖パウロから採って与えたものでした。自らの赤ん坊の不幸な誕生と死、それに取って代わるかのように、スメルジャシチャヤが自らの命と引き換えに産み落とした赤ん坊の到来 —— 「自然界の混乱」の中で、この無教養で純朴な男が開始したのが、妻のマルファの観察によると、「神様のこと」の研究でした。グレゴリーは『ヨブ記』や『殉教者列伝』、そして『シリアの聖イサクの苦行説教集』と向き合い、殊に聖イサクの『説教集』などは、殆ど何も理解出来ないままに、数年間取り組み続けていたと言われます。「パーヴェル」という名には、ダマスコ途上のパウロの回心を向こうに置いて、グレゴリーが「神さまの子」に託した祈りが込められていたと言えるでしょう。

父称の「フォードロヴィチ」、つまり「フォードルの息子」。これはスメルジャシチャヤを弄んだと目される「好色漢」フォードルに因み、町の誰が言うともなく呼ぶようになったものとされます。西鶴の『好色一代男』ならば、さしずめ「世之介の御落胤」(好色二代男・世伝)とでもなるのでしょうか。フォードルは自分が父親であることは否定しつつも、自分に対する社会的懲罰とも言うべきこの名称を面白がっていたと言われます。ここには本人を飛び越えて、社会とフォードルとの間にあった暗闘も読み取れるように思われます。

苗字の「スメルジャコフ」、つまり「臭い男」。これは他ならぬフォードル自身が、母の緋名スメルジャシチャヤ(臭い女)からこう名付けてやったとされます(三2)。天に唾を吐く——「育ての親」グレゴリーの命名とは対照的に、瀆神的道化たる「実の父」フォードルは、自らの頭を叩き割られる種をまたも一つ、ここに蒔いたのです。

「パーヴェル・フォードロヴィチ・スメルジャコフ」—— この名前を日本名にしてみるとどういうことになるのでしょうか。「聖パウロ・世之介の御落胤・臭魚」とでもなるのでしょうか? 言語道断無茶苦茶な名前であり、「自然界の混乱」の露骨なパロディ化・言語化と言う外ありません。このような名を与えられた人間、アイデンティティを剝奪されて世に送り出された存在が、物心がついてその意味を知るに至った時、一体何を感じるのでしょうか? 何処に己の存在の独自性と誇りを見出し、如何にこの世に生き、また如何に人と対し得るというのでしょうか? ドストエフスキイがフォードルを介してカラマーゾフの世界に放り込み、グレゴリーに受け止めさせたのは、そして我々読者に投げつけたのは、このような存在「スメルジャコフ」だったのです。

考察(2) — 筆者と二人の「父」によるスメルジャコフ像 — 《※原稿化にあたり一部付加》

我々がスメルジャコフ像を積み上げてゆく手段としては、今まで検討してきた「誕生物語」や名前・「命名」のように、筆者が直接紹介するエピソードを「基礎資料」として、一つ一つ丁寧に検討してゆくことが基本であることは言うまでもありません。しかし稀にですがドスト

エフスキイは、作品の筆者に直接スメルジャコフ像を記させたり、その運命を予言させたり、また登場人物たちにもスメルジャコフ像を語らせたりすることがあり（「基礎資料」17・18）、これらの情報も見逃せません。例えば最終篇の裁判の場で、彼について様々な人物がする様々な「証言」は（「基礎資料」36-43）、人間の「他者認識」の在りようについて、芥川の『藪の中』を遥かに凌ぐ鋭い洞察と味わい深さを含むもので、これだけでも一つのカラマーゾフ論が書けるでしょう（37は後で取り上げます）。

ところでこの作品の主なドラマが繰り広げられるのは、主人公の末弟アリョーシャが20歳、長男のドミートリイが28歳、異母兄弟のイワンとスメルジャコフが24歳の時だとされます（全て「数え年」です）。そして筆者の報告によれば、24歳になるスメルジャコフは「非常な人間嫌い」で「寡黙」であり、その「性格は傲慢」で「あらゆる人間を軽蔑している」とされます（三6、「基礎資料」17・18）。続いて筆者は、スメルジャコフの育ての親グレゴリーイが、この子が「感謝の心というものを知らずに育ち、常に片隅から世間を窺う、人見知りの激しい少年になってしまった」と語っていたとも報告します（同）。これら二つの報告が示す否定的なイメージは、スメルジャコフの誕生の事情や与えられた名前から自然に考えられる帰結とも言え、彼が二十四年間で育んだものが、およそ幸福感からは程遠いものであったことを読者に印象づけるものです。しかしこのスメルジャコフ像を、彼を取り巻く人間、殊に彼の「育ての親」グレゴリーイと「実の父」と目されるフォードルにまで及ぼしてしまい、これら二人を専ら否定的なイメージで固めてしまうことは危険です。この問題を見ておきましょう。

まずグレゴリーイです。少なからぬ読者や評者が、この下男が日頃示す偏屈さや無教養さを、彼がスメルジャコフを鞭打ったり、呪詛を投げつけたり、頬打ちを食らわせたりする粗暴さと重ね（「基礎資料」3・4・5）、更にはスメルジャコフがこの養父に対して示す嘲笑や非難の言動（同3・4・17・18・20）とも結びつけて、その結果グレゴリーイとは、スメルジャコフに対する愛情などまず無い人物だと決めつけてしまいます。しかしこの結論は早計だと言わざるを得ません。この後の「考察（3）」で明らかとなりますが、鞭打ちも呪詛も頬打ちも全て、グレゴリーイのスメルジャコフに対する愛情から出た怒りの表現であり、「仕置き」と考えるべきものなのです。「否定か肯定か？」——「誕生物語」から何度も確認しているように、作者ドストエフスキイはスメルジャコフに対するグレゴリーイの心を、決して「否定」の側には置いていないのです。『カラマーゾフの兄弟』が持つ陥穽の一つがここにあります。

※以下「基礎資料」37についての考察は、上に述べたスメルジャコフに対するグレゴリーイの心を再度確認するために、また次の「考察（3）」をより理解し易くするために、今回新たに付け加えました。他の付加の部分と同様に段落を下げ、活字を小さくしてあります。

スメルジャコフの成長に関するこれらの報告・証言（「基礎資料」17・18）に対し、もう一つの証言（同37）も見ておきましょう。小説の最後に置かれたドミートリイの裁判の場で、グレゴリーイがスメルジャコフについてする、正に「証言」です。

「才能のある奴でした。愚か者で、病気に苦しめられていましたが、何よりも不信心者でした。フォードル・パーヴロヴィチと長男[★]が彼に不信心を教え込んだのです」（十二）　　[★グレゴリーイの誤り → 正しくは「次男」イワン]

これも文字通りには、ただ粗暴で愚鈍で頑迷な養父が、スメルジャコフの「不信心」を嘆いた言葉と受け取られかねません。事実彼は、ドミートリイの「犯罪」に関しては、独断的な思い込みから、この長男の運命を悲劇的な方向に追い込んでしまい、しかもその頑

迷さゆえに、自分の誤りに気づきもしないのです。グレゴリーの言動を描くドストエフスキの筆は、常に両義性を帯びた曖昧さを特徴とするものであり、我々読者は最大限に注意して、彼の心が置かれたベクトルを見失わないようにする必要があります。先の「感謝の心というものを知らずに育ち、常に片隅から世間を窺う、人見知りの激しい少年になってしまった」という証言も、決して少年を非難し弾劾し去るものではなく、その裏には少年に期待する「育ての親」の愛情と嘆きが読み取れるものであり、裁判の場での「証言」の底に流れるものもまた、養父グレゴリーのスメルジャコフに対する愛情そのものと取る方が自然でしょう。

注意すべきは、続いてグレゴリーが、スメルジャコフの「正直さ」について力説をすることです。スメルジャコフは「不信心者」だった、しかし「正直者」だった——この論理では、グレゴリーの「証言」から真の心を引き出すことは不可能でしょう。「正直者」スメルジャコフを強く言い張るグレゴリーの心は、それに先立つ「不信心者」スメルジャコフについての証言と表裏一体のものとしてあることを読み取るべきでしょう。つまりグレゴリーは「正直者」スメルジャコフが、「信心者」「信の人」スメルジャコフとしてこそ育てて欲しかったのです。「孤児（みなしご）というものは神さまの子だ」。こう言ってスメルジャコフを引き取ったグレゴリーは、この子に聖パウロから採って「パーヴェル」という名をつけてあげたことを忘れてはなりません。彼はこの子が「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」として育つことを夢見ていたのです。グレゴリーの「証言」を、その頑迷さや無教養さや粗暴さから来る悪意や敵意や絶望に満ちた呪詛と取る人は、彼に向ける視線の修正を図る必要があると思います。

改めて先に確認した『カラマーゾフの兄弟』全体の構成と基本的テーマ、また「誕生物語」を（更には以下に見る様々なエピソードも）確認してみる時、果たしてそれらの何処に、スメルジャコフに対する悪意や敵意に満ちたグレゴリーが見出せるのでしょうか？グレゴリーの造型において、ドストエフスキは何よりもまず、「神さまのこと」を求める愚直で純朴なロシア民衆を描こうとしたのです。グレゴリーを通して、ドストエフスキが我々に提示しようとしたものとは、その粗暴さや無教養さや頑迷さの遥か先にあるもの、繰り返しとなりますが、「自然界の混乱」や「闇」を越えた更にある「光」、つまりはその純朴な愛情以外の何物でもないでしょう。

ドストエフスキのグレゴリー造型に関して、そこにある聖書的磁場と彼の信について、またこの養父の信と愛に対するスメルジャコフの屈折した姿勢については、河合文化教育研究所HPの「ドストエフスキ研究会便り（8）-4」をお読み下さい。

「育ての親」グレゴリーに対して、「実の父」フョードルもまた、スメルジャコフに対する独自の愛情を示し続ける存在です。後に取り上げますが、創世記の学習中グレゴリーにぶたれたスメルジャコフが、その後間もなく癲癇発作を起こすや、彼はグレゴリーに体罰を禁じ、少年を自分の居宅に移らせ、自分の庇護の下に置きます。やがて15歳となった少年が書物への関心を示すや、フョードルは自分の書架を開放してやり、更に彼が食物に対する病的なまでの警戒心を示し始めたことを知ると、直ちにモスクワへと料理修行に送り出すのです（「基礎資料」4-8。以下の「考察（3）」も参照）。

しかしその一方で筆者は、フョードルがスメルジャコフに対して抱く強い警戒心についても記します。修道院での「場違いな会合」（第二篇）から帰り、カラマーゾフ家の夕食後の団欒時、突然スメルジャコフが、グレゴリーの信仰心を揶揄しつつ、イワンを向こうに置き「棄教者論」を語り始めます。ひとしきり信仰論争が交わされた後、下男たちを追い払ったフョードルは、イワンとアリョーシャを相手に、日頃寡黙なこの青年スメルジャコフを旧約聖書民数記の「バラムの驢馬」と重ね、こういう人間がいざとなると何を考えつか分かったものではない、こいつは「全ての人間に対してと同じく、この俺にも我慢がならない」のだと、強い不安と危惧の念を表明します（「基礎資料」17・18）。これに対し、イワンはスメルジャコフに対する軽蔑を表明するのですが（同）、フョードルはイワンが帰郷して数か月の間に、スメルジャコ

フがこの異母兄弟に強く惹きつけられつつあると共に、二人が自分に対して抱く敵意を、そして敵意が殺意に変わりつつあることをも敏感に察知していたのです（「基礎資料」14・15・16・21・22）。我々はこの間グレゴリーが、スメルジャコフがイワンによって「不信心者」とされつつあることに心を痛めていたことも忘れてはならないでしょう（「基礎資料」37）。

ドストエフスキイがスメルジャコフ像を刻む方向が明確になってきました。周囲の人間にとってスメルジャコフとは傲慢であり、自らの内に頑なに閉じ籠り、全ての人間に対して軽蔑の目を剥く不気味で厄介な存在として成長していったのです。しかしこの存在に対して、今見たグレゴリーとフォードル二人の「父親」の姿勢からも窺えるように、身近な人間はスメルジャコフに対して、決してただ悪意や敵意のみを以って対していたわけではなかったのです。グレゴリーは言うまでもなく、フォードルでさえも、この存在が担わされた重荷に対して、恐らくは良心の呵責と、少なからぬ憐れみと愛情の心をもって接していたのでしょう。ドストエフスキイが、二人の父を含めて、スメルジャコフを置く両極性——それが「闇か光か？」いずれに向かうものであるか、我々はなお一つ一つのエピソードを注意深く検討しつつ、そのベクトルを正確に見極めてゆく必要があります。

考察（3） — 少年・青年時代の様々なエピソード —

スメルジャコフに関する「基礎資料」について、今まで主に1と2について検討をしました。（17と18、そして37についても見ました）。今度は3と4を中心に取り上げようと思います。他の5-7、8-11のエピソードは、これら二つのエピソードの延長線上で理解可能でしょう。12については最後の「考察（4）」で扱います。

まず3のエピソードです。これが一般にスメルジャコフに関して最も広く知られた物語ではないでしょうか？ 少年スメルジャコフが猫を絞殺し、自らはシーツを法衣のように身にまとい、香炉のようなものを振り回しながら葬送の歌をうたい、密かに葬式の稽古をしていたという悍ましく懼ろしいエピソードです。グレゴリーに現場を取り押さえられた少年は、こっぴどく鞭打たれ罵られると、片隅に潜り込み、そこから一週間白い眼を剥いていたとされます。

猫を絞殺し、その死骸に向かって葬送の歌をうたう。少年スメルジャコフが一人密かに執り行っていたこの葬式遊戯に潜むものとは、相容れぬ両極的な心だと考えられます——自らが弱く哀れな小動物の生と死一切を司る支配者、「残虐なる主」として立とうとの心。そして同時に、その犠牲者に鎮魂の哀歌をうたい、「憐れみ深き主」として臨もうとの心。これら相矛盾した願望です。この「ブラック・ホール」の奥に蠢くのは少年の底知れぬ孤独な姿であり、その闇の底で少年は弱き生き物を前に、その運命を己の理不尽で醜悪な運命と重ねようと試みていたことが伺われます。そこにあるのは運命に対する怨念と復讐の刃であり、「残虐なる主」としての快感と、また同時に被造物に対する「憐れみ深き主」としての激しい愛情の表出だと言えるでしょう。悪魔性と天使性とが入り交じった「禁じられた遊び」——この子の誕生時にグレゴリーが直観したことの、正に延長線上に顕れ出た懼るべき遊戯であり、我々はこの時彼が少年を激しく鞭打った心を読み取るべきでしょう。

次の4ですが、これは12歳になったスメルジャコフに、グレゴリーが旧約聖書の創世記・天地創造の話を教えようとしたエピソードです。この時少年は「師」に向かい、驚くべき問いを發したのです——神が第一日目に世界を創造し、この神の天地創造から四日目に太陽や月や星の光が射したというのなら、第一日目に一体光は何処から射していたのか？ 少年は

グレゴリーに頬を殴りつけられ、間もなく彼を生涯苦しめる癲癩の発作が始まります。

創世記に於ける光の始原について、少年が突きつけた問いの鋭さ。これにはグレゴリーならずとも、どの大人でも舌を巻かざるを得ません。初めて触れた「聖なる書物」の内に少年が見出したのは、天地創造にあたって神の唯一絶対であるべき「光」が、実は前後二つも存在したという矛盾であり、この時彼は、このような話を美しやかに教える養父を馬鹿にしたというよりは、この創造神話の裏に隠された「真実」をこそ知りたかったのではないのでしょうか？少年の鋭利な頭脳が知りたかったのは、二つの「光」の真贋だとか前後についてなどよりも、究極の始原にあった唯一絶対の「光」について、つまりは存在の絶対的始原そのものについてだったのではないのでしょうか？成長と共に己の出生の秘密を知るに至ったスメルジャコフにとり、父と目されるフォードルや母スメルジャシチャヤの遥か向こうにあったであろう、己の存在の真の始原を知ること、「パーヴェル・フォードロヴィチ・スメルジャコフ」という屈辱的と言う外ない名前を遥か遠く遡って、己の真の名前を知ることこそが、彼の裡に未だ定かにならぬまま蠢く希求であり問いであったと考えるべきでしょう。「父母未生前の我が姿」への問い——ドストエフスキはこの存在を、不条理で醜悪な運命の底に突き落とすと共に、我々凡人の及び難い形而上学的・宗教的思索を展開する少年として成長させたのです。しかし「思索を展開する」と言っても、注意すべきですが、筆者はスメルジャコフの場合、イワンの論理的推論によってなされる「思索」であるよりは、無意識の裡にひたすら「印象」を積み重ねることを特徴とするものであり、それはロシア農民的な「観照（瞑想）」と呼ぶべきものであったと記します。イワンもまた彼が「思想を蓄め込む」と表現しています（三八、「基礎資料」18）。この「観照」、「思想の蓄積」が彼を何処に導くのかについては、最後の（4）で確認しましょう。

スメルジャコフの「思索」に関して言えば、彼が示す聖書知識の深さと、それをういた論証の鋭さは、フォードルから「詭弁家」とも「イエズス会士（宗教的詭弁家）」とも呼ばれるほどの驚くべきものであることも確認しておくべきでしょう（「基礎資料」14・17・18・20・30・31・33・37）。恐らく少年はこの創世記のエピソードの後、一人聖書世界に入り込み、そこで独自の「思想の蓄積」、或いは「観照」を重ねていったものと推測されます。事実筆者は、イワンとスメルジャコフとが交わした最初の議論の一つが、創世記の光の起源の問題であったと記します。この「思想を蓄め込む」下男に強く興味を覚えたイワンは、進んで彼との接触を図ります。やがて提示されるのが「地質学的変動」の思想です。良心も神も「キリストの愛」も否定し去ったイワンは彼に、人間を縛るものなど何もない、このことに気づいた者には「一切が許されている」、神となるのだという人神思想を説き聞かせるのです。イワンとの最後の別れ近く、スメルジャコフは二人が熱く交流をしていた頃のことを回想して、こう語ります。

「[自分が父親のフォードル殺しに至ったのは]《一切が許されている》と考えたからです。このことは本当にあなたが教えて下さったのですよ。あなたはあの頃色々とお話をして下さいました。というのも、もし永遠の神がいないならば、いかなる善行もありはしない、そもそも善行など何の必要もないのだと。あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」(十一八)

スメルジャコフの孤独の内に突如現れたのがイワンでした。そして凡俗を軽蔑するイワンが自らの思想を全面的に開示したのは、アリョーシャを措いて、ただ一人スメルジャコフだけでした。ひたすら「印象」を積み重ね、「思想を蓄め込む」み続けてきた「観照者」スメルジャコフ。イワンの人神思想が、その心を青天の霹靂のように打ったことは想像に難くありません。少年の時以来スメルジャコフが無意識裡に「食べるように」求め続けたものとは、単に猫の葬式遊戯

でも聖書を用いての知的遊戯でもなく、イワンがモスクワから持ち来った、正にこの人神思想だったと言うべきでしょう。スメルジャコフの目の前に新たに開かれたのは「一切が許されている」現実であり、己の忌まわしい運命一切を消し去り、全く新たに己の運命を開始する可能性だったのです（「基礎資料」14, 15, 17, 18, 21, 22, 23, 24, 38）。

以上のベクトルを押さえておけば、スメルジャコフについてドストエフスキイが積み上げる他のエピソードも、相当程度理解可能となるのではないのでしょうか？ つまり不条理で醜悪な己の運命を抱えた彼の、まずは存在の真の起源を知ろうとの願望、また存在の究極の行き先を知ろうとの願望、そして己の旧き運命一切の消去と全く新たな運命の開始への願望——これら彼の裡深くに蠢く両極的願望の噴出として理解出来るように思われるのです。

※以下は、当日時間的制約から扱わなかった他のエピソードの考察です。
十分な論証というよりは、要点の整理・問題提起の形で記しておきます。

★「基礎資料」6

スメルジャコフが15歳の頃のことです。フョードルは、自分の書架に並んだ本を眺めるスメルジャコフの姿を見て、この少年が自由に本を手にとることが出来るよう書架を開放してやり、更にゴーゴリの『チカーニカ近郊夜話』とスマグラーダフの『世界史』を勧めてやります。しかしそれらは、すぐに放擲されてしまいます。ゴーゴリが見事に描き出すウクライナ農民の猥雑で生命力に溢れた生活や饒舌な怪奇譚も、スメルジャコフには「嘘」でしかなかったのです。またスマグラーダフの博識が次々と繰り出す数知れぬ歴史的事実も、ただ「退屈」でしかなかったのです。これを少年の愚鈍さや頑なで閉じた心のなせる業と考えるのは誤りでしょう。15歳となったスメルジャコフの裡では、ゴーゴリやスマグラーダフが記す文学的虚構や歴史的事実の構築など一つ一つ付き合うよりも、人間の生の究極の意味、他ならぬ己の運命の真の始原と行き先をこそ、まずは知りたいとの願望が蠢いていたのではないのでしょうか？

★「基礎資料」7

間もなくスメルジャコフは、食物に対する病的なまでの警戒心を顕わし始めます。スープを始めとして、自分の口に運ぶもの全てをフォークで突き刺し、顕微鏡を覗き込むかのようにじっと見つめ続けた末に、ようやく意を決したかのようにそれを呑み込むようになったのです。グレゴリーから報告を受けたフョードルは、直ちにスメルジャコフをモスクワへと送り出します。医者に診てもらうためではなく、「料理修行」をさせるためです。ここに認められるのは、何よりもまず彼の痛ましい猜疑心——地上のありとあらゆるものが、果たして清澄・清浄・透明であるのか、偽りや濁りや毒無きものであるのかを疑わずにはいられない心であり、恐らくそれは、彼の内深くに刻まれた深い傷から顕れ出る猜疑心であると考えべきでしょう。

事実ドストエフスキイは、運命がスメルジャコフの心に刻み込んだ傷について、彼自身の口から表明させる重大な場面を描いています。スメルジャコフとマリアのデートの場面です（「基礎資料」20）。今回は扱いませんが、ドストエフスキイはこの時スメルジャコフに、己の運命への呪詛を激しく表明させ、しかもそれをアリョーシャに立ち聞きさせるのです。マリアを介し、スメルジャコフとアリョーシャとが「出会う」瞬間であり、独特のユーモアで色付けされたこのデートは、『カラマーゾフの兄弟』の決定的な転換点の一つとして、最大限に注目すべきでしょう。

★「基礎資料」5, 11

スメルジャコフの癲癇発作についても取り上げておかなければなりません。先にも記しましたが、創世記の光の始原について問うたことで、グレゴリーから激しく殴打された少年に、間もなく癲癇発作が始まります。ドストエフスキイ文学の読者は、ドストエフ

キイ自身が生涯この病に苦しんだことを知るばかりではありません。『白痴』のムイシュキン公爵や『悪霊』のキリーロフを通して、「聖なる病」と言われるこの癲癇が、如何に「懼るべき病」であるかを知らされるでしょう。つまりこの病を持つ人は発作に襲われるや、まずは絶対至上の法悦感（オーラ）に領されると言われます。しかし続いて、その人の肉体と精神は恐ろしい虚脱感に襲われるとも言われます。しかもそれは、殆ど死の瀬戸際にまで連れ去られるかのような、絶対虚無の感覚だとされるのです。ここにあるのもまた光に対する闇、存在そのものが宿す絶対肯定性と絶対否定性という懼るべき両極体験です。

果たしてドストエフスキイは、スメルジャコフの不幸と苦しみにただ屋上屋を重ねようとして、彼にこのような癲癇発作を与えたのでしょうか？ ここにいるのは自らの病と重ね、スメルジャコフに形而上学的とも宗教的とも言うべき存在の両極感覚を体験させる「残酷な天才」ドストエフスキイと考えるべきでしょう。

★「基礎資料」8-11

さて「料理修行」のため数年間モスクワで生活をしたスメルジャコフですが、これに関するエピソードも少なくありません。注意すべきは、彼がモスクワで変貌を遂げたとされることです。しかしそれは飽く迄も外面的な変貌であり、彼はこの街に一切関心など示さなかったのです。なるほど筆者は帰郷後の彼について、こう記します。「急に老け込んで皺だらけになり、顔色も黄ばんで去勢された男ようになった」——しかし我々はここから、彼が去勢派のセクトに入ったのだというようなエキセントリックな憶測・空想の世界に入り込むよりも、「内面はモスクワに向かう前とほとんど同じで、相変わらずの人間嫌いであった」という筆者の報告に耳を傾けるべきでしょう。モスクワという大都会においてもスメルジャコフは、我々が今まで見てきた「スメルジャコフ」であり続けたのです。

帰郷後スメルジャコフの内では、以前にも増して「人間嫌い」、殊に「女性嫌い」の傾向が強まっていったとされます。しかしこの現象も、先に見た食物一切の清澄・清浄・透明を疑う心と同一線上にあるものと考えれば、何ら不思議なことでも異様なことでもありません。つまりこの傾向もまた、他者との間に絶対至上の信頼関係を築き得るか否かを疑うという、スメルジャコフの出生に由来する心理と思考の悲劇性と考え得るでしょう。また彼が飛び切りの「洒落者」になって帰ったという事実も、田舎青年がその裡に密かに蠢かせ続けてきた変身願望の一表現、微笑ましくも物悲しいエピソードとして受け取り得るのではないのでしょうか？

「誕生物語」から始まって、以上のようなエピソードを積み重ねた先に、ドストエフスキイが我々読者に提示するのは、いよいよスメルジャコフが踏み出す新たな一歩です。最後に「基礎資料」12を確認して終わりたいと思います。

考察（４） — クラムスコイの絵画「観照者」と重ねて —

筆者によれば、青年スメルジャコフはよく庭や通りで立ち止まっては「物思いに沈み」、そのまま十分ほど佇んでいたとされます。この青年の異様とも言うべき「物思い」^{ザドゥームチヴASTE}の姿は、イワンの明晰な頭脳によってなされる論理的「思考」^{ドゥーム}や「思索」^{ムイシリ}と言うよりは（イワンはそれを「思想を蓄め込む」と表現したのでしたが）、専らロシア民衆によってなされる、様々な「印象」を無意識の裡に積み上げる「観照」^{サゼルトヴァーニエ}（瞑想）であったとされ、そこに画家クラムスコイ（1837-87）が描いた「観照者」^{サゼルトヴァーニエリ}（瞑想者）が重ねられるのです。

「それは冬の森を描いた絵で、森の中の道で、この上なく淋しい場所に迷い込んだ百姓

が、ボロの百姓外套に木皮の靴を身に着け、一人ぼつんと立って何やら物思いに耽っているようなのだ。しかし彼は考えているのではなく、ただ何かを《観照》しているのである。[中略]。彼は自分が観照している間に受けた印象を、恐らく自分の内に秘め隠すのであろう。しかもこの印象は彼にとって貴重なものであり、恐らく彼はそれらを密かに、無意識の裡にさえ積み重ねてゆくのだ——何のため、何故なのか、勿論知りはしない。長い年月をかけて印象を積み重ね、ことによると放浪と魂の救済のため、突然一切を放棄してエルサレムへと出かけて行ったり、またことによると、突然故郷の村を焼き払ったりすることもある。いや場合によっては、その両方が一度に起こるということもあり得るだろう。観照者は民衆の間には相当多い。そして恐らくスメルジャコフもまたそのような観照者の一人で、自分でもなぜかは未だ殆ど分からぬままに、恐らく印象を食るように蓄積していたのであろう」(三六)

「誕生物語」に於いて、「悪魔の息子」と「信心深い女」から生まれた子というグレゴリーイの言葉が指し示した両極性を受けて、ここで筆者が新たに予告するのをもまた、深い両極性に分裂したスメルジャコフの行動です。つまりドストエフスキイは、今まで様々なエピソードによって積み重ねてきたスメルジャコフに関する情報を、ここでまず「観照者」と「印象」という二語に凝縮させ、次にこの「観照者」が無意識的に「食るように蓄積してきた」「印象」を「突然」爆発させる可能性、つまり青年が新たな運命に向かって踏み出す一歩、正確には二つの両極的行動の方向を、はっきりと我々読者に指し示すのです。

指し示される行動の一つとは、スメルジャコフが「突然故郷の村を焼き払う」こと、つまり「悪魔の息子」が生ませた子が、その道を歩み通して行き着く先であり、具体的には父親フォードルの脳天を叩き割ることでしょう。もう一つは、彼が「放浪と魂の救済のため、突然一切を放棄する」ことであり、その向かう先は「信心深い女」が生んだ子が、その道を貫き通した先にある「エルサレム」です——誕生以来この青年の内に刻み込まれた両極分裂、様々なエピソードの内に謎のように表現されてきた「闇と光」が、それぞれ極限にまで増幅されて、「突然」迸り出る時が来たのです。

極限にまで増幅された両極分裂。しかし注意すべきことに、筆者はこうも記します。「いや場合によっては、その両方が一度に起こるということもあり得るだろう」——「観照者」スメルジャコフの内から突然迸り出る行動とは、「闇か光か?」「あれかこれか?」という二者択一の方向であるよりは、「闇も光も」「あれもこれも」という二者合一の道、同時爆発である可能性が予告されたと考えるべきでしょう。「闇も光も」「あれもこれも」——これら相容れぬ二つの道が一つになるのは果たして何処であり、如何にして可能なのか? 我々は改めて、作者ドストエフスキイがスメルジャコフを投げ込んだ運命の困難さと懼ろしさを思わざるを得ません。

5. おわりに

今日我々はスメルジャコフの「誕生物語」から入り、そこで確認したグレゴリーイの「自然界の混乱」を出発点として、最後は筆者による「観照者」スメルジャコフの提示に至るまで、『カラマーゾフの兄弟』の「ブラック・ホール」たるスメルジャコフに関わる両極性を確認してきました。この作業から強く浮かび上がったのは、不条理で醜悪な運命の内に投げ込まれ、心の奥深くに両極分裂を刻印された「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフの姿であり、この上なく孤独なその生の軌跡でした。ドストエフスキイが描いた数多くの「罪なくして涙する幼な子」の中で、恐らくスメルジャコフはその極北に位置する一人でしょう。この存在と正面から向き合い、彼が負わされた両極性とその苦しみを理解することは、そのまま我々の世界

に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちの運命を理解することであり、かつ彼らが負わされた世界の「病」を、自分自身の「病」として受け止めることに他ならないでしょう。

しかし我々は彼の「病」を、単に博愛主義的な思いやりを以って癒され得るようなものと安易に考えることは許されません。我々はグレゴリーが、スメルジャコフとは「悪魔の息子」と「信心深い女」から生まれたのだと語ったことを何度も確認してきました。ドストエフスキイが提示したのは、我々小市民的「健常者」の意識や行動一切を無とし、一気に葬り去るような懼るべき毒性を持つ「病」なのです。

この「病」を『カラマーゾフの兄弟』のテキストに即して深く理解し、それに対する治癒策・癒しを見出そうとする時、我々は「観照者」スメルジャコフがこれから如何なる道を歩み、何処に向かうのかを正確に見極める必要があるでしょう。ドストエフスキイがこれから描くスメルジャコフの歩む道と、そのドラマは長く険しいものであり、それらを簡単に挙げてみるだけでも膨大なものです——イワンとの出会いと交流から始まり、「父親殺し」を経て、「悪業への懲罰」(ゾシマ長老)、神との出会い、そしてイワンとの別れと自死、更にはアリョーシャによる鎮魂歌(『ゾシマ伝』六三I)に至るまで。ここには『カラマーゾフの兄弟』後半のピークをなす一連の濃密この上ないドラマが拮がっています。(→《付》《残されたテーマ》1-8も参照)。これらのドラマ全てをここに取り上げて検討することはとても短時間でなし得ることはありません。今回我々はこのスメルジャコフが新たに踏み出そうとしている道こそ、我々が追うべき道であることを確認し、その端緒を視界に捉えたことを以ってまずは十分としたいと思います。(了)

《付》

《残されたテーマ》

④で「観照者」としてのスメルジャコフを紹介した後、また続いて⑤の「おわりに」でも、ドストエフスキイがこれから描くスメルジャコフに関するドラマについて言及をしました。改めてその主なテーマを以下に記し、それらに対応する「基礎資料」の番号も付しておきます。スメルジャコフと取り組む際の参考として下さい。

1. マリアとの交際、デート・・・13, 19, 20, 26, 28, 34
2. イワンとの交流・・・14, 15, 17, 18, 21, 22, 23, 38
3. 父親殺し・・・16, 18, 22, 23, 24
4. 「悪業への懲罰(カラ)」・・・24, 37, 29, 30, 31, 32, 33
5. ドミートリイとの関係・・・15, 25, 36
6. アリョーシャとの関係・・・19, 20, 28, 30, 34, 35, 37
7. カチェリーナとの関係・・・29, 39, 40
8. 裁判での検事と弁護士・・・41, 43

《スメルジャコフに関する私の考察》

・『カラマーゾフの兄弟論—砕かれた魂の記録—』

- 2016、河合文化教育研究所
 ・「カラマーゾフの世界 ―スメルジャコフを巡って―」
 2018-9、「ドストエフスキイ研究会便り」(8-13)、
 河合文化教育研究所HP
 (目次⁴の(5)-(8)について、また上の《残されたテーマ》について、これら二つのカラマーゾフ論
 で考察しています)

《スメルジャコフに関する「基礎資料」》

- ・以下はスメルジャコフに関するエピソード、データをまとめたものです。
- ・この存在を検討する際の「基礎資料」として参考にして下さい。更に広くは、ドストエフスキイの作品と取り組む際の、方法論上の参考として下さい。
- ・発表の際に用いたプリントでは²に入れ、43項目を一纏めとして提示し、テーマごとの区切りには網をかけたが、ここではひと纏まりごとの間に一行ずつ空間を取り、★印をつけました。
- ・各項目末の[]内に、例えば[56]とあるのは、『カラマーゾフの兄弟』第五篇第6章の意味です。その前と同じ箇所については[同]としてあります。
- ・各項目は原則一行で記し、重要単語や概念の説明はメモ程度に留めました。
- ・可能な限り、時系列に沿って記してあります。
- ・これら43の選択や区分け等は、当然ながら今後変更の可能性があります。これを参考に、皆さん自身が独自の「基礎資料」を作成して下さい。

★

1. 誕生(グレゴリー夫婦の悲劇、スメルジャシチャヤの悲劇、「自然界の混乱」)[三2]
2. 名前の付与(「パーヴェル・フョードロヴィチ・スメルジャコフ」)[同]
3. 猫の葬式遊戯(少年の頃、猫を殺害しては葬送の歌をうたう、グレゴリーの懲罰)[三6]
4. グレゴリーによる聖書教育(12歳、創世記「光」の起源についての問い)[同]
5. グレゴリーの反応(殴打、癲癇発作の開始、フョードルの庇護)[同]
6. フョードルによる教育の試み(15歳、フョードルの書架への関心、教育の失敗)[同]
7. (6の後、間もなく)潔癖癖の露呈(食物に対する病的なまでの警戒と吟味)[同]

★

8. モスクワへの料理修行(数年間、モスクワへの無関心、寡黙さ、人間嫌い)[同]
9. 帰郷・1(面変わり、洒落者に、外見は老け、顔は黄ばみ、皺が多く、去勢派のよう)[同]
10. 帰郷・2(内面は変わらず、人間嫌い、女性嫌い、料理の才、金銭への潔癖さ)[同]
11. 癲癇発作の頻発化(フョードルによる結婚の勧め、蒼ざめて無視)[同]

★

12. 「観照者」スメルジャコフ(クラムスコイの絵画に重ねて、新たな両極的行動の予告)[同]

★

13. (一年前にモスクワから帰郷した)マリアとの交際、母娘宅への訪問[五2]
14. (春に帰郷した)イワンとの交流(人神理論の伝授から「父親殺し」へ)[五6]
15. 「父親殺し」への準備(「前衛的肉弾」、ドミートリイへの濡れ衣)[同]
16. ジューチカ事件(「父親殺し」の一カ月前、イリュエシンを唆し、仔犬にピンを吞ませる)[十4]
17. 棄教者論(カラマーゾフ家の夕食の席で、イワンの破門者論との呼応)[三7]
18. 「パラムの驢馬」「ロシア的信仰」「ジェズイット」(フョードルの批評)[三8]

★

19. マリアとの逢瀬（一張羅の二人、ギターの弾き唄い、アリオーシャの目撃） [五2]
20. (マリアを前に) 運命への呪詛 (ヨブ、イエスを向こうに置いての) [同]
- ★
21. イワンとスメルジャコフとの交流、その経緯、「傷ついた自尊心」 [五6]
22. イワンへの「父親殺し」の最終説得（主従関係の逆転） [同]
23. イワンのモスクワ逃亡、癲癇発作の偽装 [五7]
- ★
24. 「父親殺し」の決行（パニックから真正の癲癇発作へ、入院） [八4・5、十一7]
25. 予審、ドミートリイの証言（スメルジャコフへの軽蔑） [九5]
26. 病院への「親切な人々」の見舞い [十一6]
27. 「悪業への懲罰」、神との出会い [十一6・7・8]
28. マリアの新居へ（「婚約者」として） [十一7]
- ★
29. イワンとの三度の対決（「傲然」から、死相が出るほどの焦燥へ） [十一6・7・8]
30. 『シリアの聖者イサクの苦行説教集』との直面（愛の説教者） [十一8、三6]
31. イワンへの「父親殺し」の説明、両者への神の現前 [十一8]
- ★
32. 自殺（縊死）と遺書 [十一8・9・10]
33. 遺書（「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」）
34. マリアの疾走（アリオーシャへの報告、アリオーシャの祈り） [十一10]
- ★
35. 『ソシマ伝』最終章・自殺者論（スメルジャコフへの鎮魂歌） [八31]
- ★
36. 裁判、ドミートリイの反応（「犬には犬の死!」、「無実」） [十二1・14]
37. 裁判、グレゴリーイの証言（才能あるが愚か者、病気持ち、不信心、非常に正直） [十二2]
38. 裁判、アリオーシャの証言（「犯人はスメルジャコフ」） [十二4] [十一5・6]
39. 裁判、イワンの証言（「自分が教唆し、スメルジャコフが殺害」） [十二5]
40. 裁判、カチェリーナの証言（イワンの弁護、彼の迷いについて） [同]
41. 裁判、カチェリーナの証言（町ではスメルジャコフによる殺害との噂） [同]
43. 裁判、検事イッポリートのスメルジャコフ評（的外れ） [十二8]
43. 裁判、弁護士フェチュコーヴィチのスメルジャコフ評（的確さ） [十二12]

次回「ドストエフスキイ研究会便り（17）」について

私の恩師小出次雄先生が末期の床に臥せっておいでだった時のことです。付き添っていた私に突然声をかけられました。

「芦川君、何か質問はないかね？」。咄嗟のことで私の頭は真っ白になってしまい、何も浮かんでできません。暫くの沈黙の後に先生が言われました。「君は、問いというものを持たないのかね？」。この時の恥ずかしさと無念さを忘れません。

人生に於いて問いと出会い、問いを持って生きることの大切さ、またそもそも問いとは何かということ、先生は常に語っておいででした。私はそれに応えられなかったのです。

今回は、2014年7月東京大学宗教学科の大学院生の皆さんを中心とする日本宗教思想史研究会に招かれ、「様々な問いとの出会い」という題でした小講演を原稿化して、掲載する予定です。ここでは、宗教・思想の領域で本格的な研究生生活を始めた学生の皆さんに、若い頃私が先生によってどのような問いに目覚めさせられ、またどのような厳しい問いを以って思索を迫られたか、また自分がどのような先哲や書物や事件の中にどのような問いを見出したか等についてお話をしました。

これを機会として、皆さんが改めて「問い」というものについて考え、ここから人間と世界と歴史に向かう一つの手掛かりを得て頂けるならば幸いです。